

---

# 単なるブックス未来屋酒田店

ゆっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

単なるブックス未来屋酒田店

### 【Nコード】

N8446Z

### 【作者名】

ゆっち

### 【あらすじ】

この世に本屋が嫌いな人は存在するのだろうか。

田舎にあるごくごく普通の本屋、ブックス未来屋酒田店。

毎日ダラダラと過ぎていく店員達に、予期せぬ出来事か!?

超個人的な店員達が繰り広げる単なる日常の勤務風景・・・なのか？

？

果たして本屋を嫌いな人が、世の中にはどのぐらいいるのだろうか。

本屋に行くと思いが治まらなくなるとか、前世がヤギで紙を見ると無性に食べたくなるとか、そういう病的な症状がない限り、みんなにとって本屋は好きな場所の1つではないのだろうかと思っ  
ている。

コミックやティーンズ文庫の棚の前では、みんなニヤニヤと実に楽しそうに笑いを浮かべながら立ち読みしているし、

女子高生達はギャル系雑誌を見ながら

「ちょっとこれ超可愛くない？マジヤバイって」

と、一体何がマジヤバイのか聞いてみたくなる会話をしている。

2

老人男性達は元気に官能小説を吟味、おば様達は嬉しそうに韓流コーナーで雑誌を広げながら、

『このドラマは面白かった』『この俳優がお気に入りなの』

と女子高生顔負けにキャツキャしながら立ち話したりと、みんな個々に本屋を満喫してるように見える。

最近では、パソコンやケータイで本が読めるようになって、本屋で本が売れないと言われているがそんな事はない。

みんな本屋が好きなのだ。だから本屋はなくならない。私はそう思っている。

そんな私の揺ぎ無い定義が、まさか根底からひっくり返ろうとして

るなんてこの時はまだ知るよしも無かった。

上仲沙和<sup>うえなかざわ</sup>19歳。高校を卒業してすぐにこの『ブックス未来屋酒田店』に就職した。

丁度良く従業員を募集していたので応募したらなんと受かってしまった。

他多数の応募者を蹴落として、私が採用されるだなんて奇跡といふべきか、18歳にして運を使い果たしたといふべきか、いやいやそうじゃない。

店長の人を見極める目が超一流だったに違いない。

10キロ先のチーターの交尾ですら多分見えるであろう、その目で『この子は何かを持っている』

そう思ったに違いないのだ。上に立つ者、人を見極める目がなければ店長など勤まる訳がないではないか。

ま、私を採用してからの店長の口癖は、私がミスする度に

『人選を間違った、人選をミスった、俺には人を見る目が全く無かった』

を連呼するようになったが、私はあえてそこには一切反応せず確実に聞き流すテクニックを身に付けた。

それもまた1つの成長の証。私はそう自分を自分で評価している。

店の開店時間は10時。私達は9時までに出勤する。今日発売の雑誌を開店時間までに店出ししなければならぬのだ。

本を並べながら、『この本面白そうだな〜よし、買って帰ろつと』  
といち早く品定めできるのが本屋で働く者の唯一の特権だったりする。ま、特権などそれぐらいしかないのだが。

「おはようございます。あれ？咲真さん今日出勤でしたっけ？」  
私が裏口から店に入ると、咲真さんがパソコンを見ながらコーヒ  
ーを飲んでいた。

土門咲真<sup>どせけん</sup>20歳。かなりのイケメンで高身長。手足の長い八頭身だ。  
いつも爽やかで、咲真さんの笑顔にキュンとこない人はいないと思  
う。

手芸・料理等の担当をしていて手先はとても器用らしい。

「沙和つち、おはよう。なんか稀一さんからメールが来ててさあ、  
今日朝礼で重大発表があるから全員出勤するようになって。」

そんなの電話でいいじゃんかなあ、電話でさあ。

あーあ、せつかくの休みなんだから、もっとゆっくり寝てたかった  
のにな。」

咲真さんはパソコンをいじりながらブツブツと文句を言っている。  
稀一さんというのは店長の事だ。

ふうん。重大発表かあ…なんだろう。店の改装とかかなあ。稀一さ  
んの電撃結婚とかではない事は確かだろう。

私はタイムカードを押す。

「咲真さん、今日デートの予定とかないんですか？」  
私はニンマリしながらちよつと聞いてみた。

「そうそう！姉貴と出かけるんだ。姉貴がどうしても中町のジェラ  
ードを食べに行きたいって言うからさ。一人で行かせるのって可  
哀想じゃん？」

女一人でアイス食べるだなんて、そんな姉貴の姿想像しただけで涙出てくるじゃん。だから一緒に食べに行つてあげるんだ〜」  
咲真さんは嬉しそうに答えた。

女一人でアイスが可哀想？私なんて、いつも独りで牛丼食ってますけど？

喉まで出かかったがグツと呑み込んでみた。

ああ、そうだった。咲真さんは姉貴大好きなシスコン男だった。聞かなきゃ良かった、あーあ、失敗。

私は自分で話題を振っておきながら最高に不愉快になったので、咲真さんの話を聞かなかったかのようにスルーしてみた。

颯爽とロッカーを開けて荷物を放りこむと、中からエプロンを取り出して装着した。

そして足早に事務所から出ようとしたその時、突然トイレから青登さんが勢いよく飛び出してきた。

三浦青登<sup>（みほ）</sup>21歳。耳にピアスを開けてデニムをこよなく愛する、咲真さんとはまた違ったタイプのイケメンだ。

手首には常に皮のブレスレットをはめていて、外すとなぜか力が出ないんだそうだ。

お前はアンパンマンか？&#x2D;いつも突っ込みを入れなくなる。

青登さんの担当は幼児・育児・ペット等。

外見からは想像がつかないが、実は物凄く子供や動物が好きらしい。家で飼っている犬を溺愛していて、病気になった時には1週間仕事を休んだ。

人は見かけで判断してはいけないという歩く見本のような男である。

「わっ…ビックリしたっ！青登さんも来てたんですね、おはようございま…」

全部を言い終わらないうちに青登さんは私の手を握りしめて叫んだ。

「下痢が止まんねえんだよ、沙和ちゃん!!」

「…そうなんですか。で、手は洗ったんですよね？」

「あーもう、昨日サクランボ食いすぎちゃってさあ。だってさあ、山形県民たるもの、そこにサクランボがあつたら食うだる普通!!そこに山があつたら登るのと同じように!!なあ、沙和ちゃんそう思うだろ？それが男!!それが日本男児!!山形男子!!男がチャレンジ精神をなくしたらそこで終わりだし!!」

一体何のチャレンジ精神だ。ってか、山形男子、ってどんなんだ？

「昨日サクランボ狩りに行ったんだってさ。

お土産のサクランボ冷蔵庫に入ってるって」

咲真さんがコーヒーを飲みながら言う。

「そうなんですか。で、今、この手は洗ったんですよね？」

私にとって一番の重要ポイントは、下痢の原因がサクランボという事ではない。そんなのどうだっていい。むしろ知りたくもない。私を知りたいのは今現在、私の手を握ってるこの青登さんの手が清潔かどうかだ。

「あ、手洗うの忘れてた。」

青登さんは私の手を離すと、洗面所に手を洗いに行った。

ああ、やはりそうか。恐れていた事が現実になってしまった。

私は手を硬直させたまま青登さんの背中を鬼のような形相で睨んだ。

「あ、沙和ちゃんも洗った方がいいよ。俺の下痢菌がついてる可能性100%超え」

「言われなくても分かってますよ！」

私は青登さんを押しつけると勢いよく手を洗った。

「でもさ、この歩くビフィズス菌と呼ばれてる俺がさあ？下痢になるだなんて、なんか不吉な予感がするんだよねえ」

青登さんが不安そうな顔をして言う。

歩くビフィズス菌の意味が分からない。っていうか、単にサクランボの食いすぎでしょうが。

「ねえそう思わない？沙和ちゃん」

「思いません」

私は一言ハッキリ言い放つとスタスタと事務所を出て行った。

まったく青登さんは。

私は深いため息を1つ付いた。

私が店内を歩いて行くと、レジの所に苑子さんが立っていた。

渡瀬苑子<sup>わたせそのこ</sup>20歳。生粋のお嬢様で近年までは外国で暮らしてたという帰国子女だ。

働かなくても生きて行けるらしいのに自分で働いてお金を得てみたいという強い希望により、ここに就職したようだ。親の強い圧力で

見た目は少しウェーブのかかった品のいい茶髪でスタイル抜群。とてもおっとりしてて優しく、目がクリッと大きくて凄く可愛らしい人だ。

出勤時はいつも大きな黒い車で優雅に送迎されてくる。勿論退社時  
も同じだ。

ドラマでしか見た事のないような立派な車なので、そこにいる誰もが驚いて振り返るほどだ。

でも苑子さんは自分の裕福さをまるでひけらかさない素敵な人。ま、かなり天然入ってるのが玉にキズだが、それもまた許せるぐらい可愛らしい人なのだ。

資格・参考書等の担当をしている。とても知的で頭がいい。

「苑子さん、おはようございます。何やってるんですか？」

私は苑子さんの所に歩いて行く。

「あ、おはよう沙和ちゃん。私ね、早く来ちゃったものだから、NHKのドイツ語講座とフランス語講座の復習してたの。で、それが終わったから今から中国語に取り掛かるうと思ってた所なの」

苑子さんの手元には、私物と思われるテキストが山のように積まれていた。

「ただこれの時間を利用して勉強する気でいたんだろう。」

「ってか、一体何時で店に着いたんだ…？」

「沙和ちゃんもやってみる？中国語。ホラ、いつ急に本場の餃子が食べたくなるか分からないでしょう？ねっ？」

いえ、急にそんな気持ちにはならないと思うので結構です。っていうか、もし例えなかったとしても、近くのコンビニに行くかのような軽い感覚で中国へ餃子を食へにはいけません。ごくごく普通の庶民なんで、私。

ジョーダンとかではなく、本気で言ってるから恐ろしい。それが苑子さんだ。

「おはようございまーす」

向こうから、祭が小走りに走ってくる。

「おはよう、祭ちゃん」

「おはよう、祭」

私と苑子さんは手を振った。

なかがわまつり

中川祭18歳。長い黒髪のアートでキレイな顔立ちの子だ。一見、気が強くて物怖じしないタイプに見えるが、実際は物凄く恥ずかしがり屋で特に男性が苦手で目を見て話す事もできない。

しかし怖がりのくせに空手初段の腕前で、口よりも先に手が出てしまう。

文芸書・文庫担当で、文学にはとても詳しい文武両道な女の子だ。

祭は、私達の隣まで来ると

「事務所に青登さん達が居てビックリしちゃいました。」

恥ずかしそうに少し赤くなった頬っぺたを手で押さえながら言った。

「朝、大事な話があるから全員集合するようについて店長から言われたみたいなの」

苑子さんが答えた。

「なんか青登さんが、下痢だ不吉だ不吉な下痢だ、とかつて何回もしつこく言うもんだから、思わず顔面殴っちゃったんですけど、良かったでしょうか」

祭がすまなそうな顔をして言う。

「うん、いいと思うわ」

「全然問題なし」

私達は笑顔で答えた。

急に、店の表の窓をドンドン叩く音が聞こえてくる。私達は一斉に振り返ると、そこには太郎が変質者並みの恐ろしい形相で立っていた。

「も、物凄くキモイんですけど」

祭もまた物凄い形相で太郎を見つめて言った。

小谷太郎<sup>こたにたろう</sup>19歳。自称ラストサムライと言っているが、単に頭の悪い…イヤ、頭の固い硬派な男だ。女所帯で育ったせいか、女にはめっぽう弱いというか、いつもビクビクと怯えている。お姉さん達にどんな扱いを受けてきたのが想像できて同情したくなる。

コミックを担当してるので、ティーンズ文庫担当の私とは何かと関わることが多いせいか、私とは普通に話せるようになった。硬派ぶってるくせにかなりツンデレ度は高いと見ている。

外見は男らしい体育会系なのだが、運動能力はかなり低い。毎回遅刻ギリギリで駐車場から一生懸命走っては来るが、一向に前には進まないタイプだ。要はドンクサイ。

全く…また今日も遅刻ギリギリか。

私は不機嫌な顔をしながら玄関のカギを開けてやった。

太郎はハアハアと肩で息をしている。

「悪い。その道路をだな、カルガモの親子が横断しててだな、それがまた10羽以上連なつてて、しかも最後の1羽がイキナリこけて、しかもそいつが…」

「はいはい、分かったから早くタイムカード押してこないと遅刻だよ」

「あ、うん、すまん」

太郎はダツシユで事務所に駆け込んで行った。

「相変わらず足遅いわよね」

「つていうか、本当にキモイです、あの顔」

苑子さんと祭が、太郎の走っていく後ろ姿を見つめながら呟いていた。

「稀一さん、来ないねえ」

苑子さんは、中国語テキストをしながら言う。

「ま、あの人は時間通りに来た試しがないですもんね」  
祭が外を見ながら言った。

と、その時バイクの音がけたたましく聞こえてきた。

「来たみたいだね」

「じゃ、私、咲真さん達呼んできます」

私は事務所に走って行った。

稀一さんはハーレーで入社するので、来たら音ですぐに分かる。店長らしからぬチャラチャラした外見と態度なのだが、そんな自由奔放な上司だからこそ私達も自由に仕事ができるのかもしれない。

みかみきいち  
三神稀一 26歳。この若さで店長に抜擢されたのだから、きつと凄

い人なんだろう。一（と、思いたい）  
アメリカ人になりてえ、が口癖で、同じくアメリカかぶれの青登  
さんと、いつもアメリカンドリームについて熱く語っているが、二  
人共一度もアメリカには行った事はない。

店長とはいえ経理事務も完璧にこなし、本という本の全ての分野に  
詳しいので凄く頼りになる存在だ。

「おーい、朝礼すんぞー」

稀一さんは、玄関から入ってくるなり大きな声で叫んだ。

今日も派手なアロハシャツを着ている。それで仕事する気なのか。

私達は稀一さんの前にゆつくりと一列に並んだ。

？

稀一さんは腕組みしながら私達の顔を一人一人じつと見つめる。私達も稀一さんの顔をじつと見つめ返した。

しばらくそのままの状態です。沈黙が流れる。すると突然稀一さんが今までに見た事もないような優しい微笑みを浮かべた。

それを見た私達はビクツとして、みんなその不気味な微笑みにクギ付けになった。その状態でまたしばらく時が過ぎた。

何だろう、この無駄な沈黙。しかも、何このキモイ笑顔。バイクで事故って頭でも打ったのだろうか。私はゴクリと1回生唾を飲んだ。

チラツと隣に立っている太郎を見ると、太郎も私の方をチラツと見ている。聞いていた。

「かなりキモいな……。」

太郎が小さい声で呟いた。私は小さく頷いた。

向こうでは咲真さんと青登さんが

「お前、コレなんとかしろよ……。」

「お前こそ、この状態何とかしろって。」

お互いを肘で突き合っている。

その時、いきなり稀一さんが肩の所で両手をグーに握ると

「みなさあ〜ん。おっはー」

そのグーにした両手をパツと広げた。

みんなは余りの衝撃に身体を後ろにのけ反らせた。

「さあ、みんなも一緒に。おっはー!!!」  
また手をグーにしてパツと広げた。

「お、おっはあ……」

私達は、言われるままに恐る恐る稀一さんと同じように手を開いた。祭だけは、あまりの恐ろしさに白目になってピクリとも動けなくなっている。

なんだろう、この妙なハイテンション。恐ろしい…実に恐ろしすぎる…。

私達は怯えきっていた。そんな私達を尻目に稀一さんは更にこれ以上ないってほどの笑顔を向けながら

「皆さんにご報告がありませう。実は、この未来屋ブックス酒田店は、なんと閉店リストにノミネートされちゃいましたー!!!」

最後まで妙な微笑みを絶やさずに一気に言い放った。

さっきのおっはーも、もの凄い衝撃だったが稀一さんの口から出た言葉は、それ以上の衝撃を私達に与えた。

「閉店リストにノミネートされた店は、一年以内に確実に閉店となりませう」

「なっ…なんで急にそんな事になるんだよ、稀一さん!!!」  
青登さんが叫んだ。

「しゃーねーじゃん。こないだ行った本社の会議で言われちゃったんだからさあ。」

稀一さんは、近くに置いてあるアイドルの写真集をペラペラと弄りながら言った。

「俺だってマジびっくりしたっつーの。イキナリ、売上が悪い10店舗は閉店対象とします、みたいなさあ。」

半分寝てたのに飛び起きたっつーの。うちの店ハンパなく売上げ悪いもん。確実にその10店舗に入ってたし。」

稀一さんは写真集のアイドルの胸の所をなぞりながら愚痴った。

うちの店はチェーン店で、全国各地に100店舗以上出店している。その中で売上ワースト10店舗の中に、うちの店が入っているらしい。

「でも、だって結構人入ってるじゃないですか、うちの店！コミックだって凄く売れてるし」

太郎が必死で訴える。

「それはそうなんだけどさあ。うちも売れてるけど他の支店はそれ以上に売れてたって事じゃないの？」

大体ホラ、うちの店の近くに古本屋が出来ただろ？あれがまずかったわ。あれが出来てから更に売上落ちたしな」

稀一さんが淡々と話す。

「じゃあ、俺達みんなクビってわけ？」

咲真さんが言う。

「ま、そついう事になるわな」「がーん…。」

クビ。せつかく仕事も覚えて毎日楽しくやってきたというのに、ク

ビ。

ああああ。おしっこ漏れそう。

私達はみんなガツクリとうなだれた。

「やっぱ朝の下痢は不吉な下痢だったんだ！俺は歩くビフィズス菌だったのに！ああ、また俺のビフィズス菌が暴れだしたようだ、お腹が…お腹があ…！」

青登さんがお腹を押さえてうずくまる。

俺は歩くビフィズス菌だった、ってお前はいつから菌だったんだ？

「ま、決定までもう少し期間があるから、例えば…例えばだよ？それまでの間に売り上げがこうウナギ登りに上がっていけば、閉店は免れる…かも知れないけどな」

稀一さんは腕を斜めに上げて、ウナギ登りを表現する。

私達は全員、その稀一さんの伸ばした手の先を眺めていた。

？

勤務時間を終えて夜のバイトの子達とバトンタッチしてから私達は店を出た。

うちの店の隣には元々おもちゃ屋の店舗があつたのだが、今は閉店して空き店舗になっている。

それで、ある日苑子さんが休憩場所が欲しいと言いだし、家のご両親に頼んだようで、他の店舗が決まるまで、その空き店舗を貸してもらえる事になった。

そんな事を平気で頼める苑子さん家ってどんだけ凄い家なんだろう。苑子さんが同僚で本当に良かった。

私達は店から出るとすぐにおもちゃ屋の中に入って行った。

中は、レトロな雰囲気を感じさせた喫茶店のような空間になっている。ここにあるソファや椅子、テーブル、家電等は全部苑子さんが持ってこさせたものだ。

外から見えるとマズイので店内を半分にしきって、奥の部分だけを使用している。

中に入ると、朝礼後に茫然としながら帰って行った咲真さんと青登さんが椅子に座って待っていた。みんな個々に合いカギを持っている。

「おつかれ〜」

青登さんが言った。

「お疲れ様です〜、2人とも来てたんですね」

私と太郎は真ん中のテーブルを挟んで置かれている椅子に、青登さん達と向かい合って座った。

祭だけは、1人離れて壁際に置かれているソファアにちょこんと座る。

苑子さんは、いつもみんなに美味しいコーヒーを入れてくれる。勿論インスタントではない。苑子さんの入れるコーヒーは、そこらへの喫茶店で飲むコーヒーよりもずっと美味しいと思う。

「どうする、これから」

咲真さんが言った。

「どうするって言われても、俺コミック以外何も詳しくないし、頭も良くないし高卒だし資格も持ってないし雇ってくれるところがあるかどうか」

太郎が深くため息をついた。

「俺だって、大学中退だもんね〜だ」

青登さんが言う。

「俺だって同じようなもんだよ」

咲真さんは両手を頭の後ろで組みながら言った。

私だって、高卒だし何も資格持ってないし、ただでさえ不景気なのに、私みたいな何の取り柄も無いようなのを雇ってくれる所なんか絶対はない。

せめてもう少し美少女だったら良かったんだけど、ごくごく一般的に顔立ちだし乳もこじんまりしてるし…ってそんなの関係ないか。私もみんなと同じように深いため息をついた。

「そ、そんなっ…」

いきなり祭が叫んだので、私達は一斉に祭の方を向いた。

「こっち見ないでください!」

祭が真っ赤になって叫んだ。

私達は、一斉に視線を元に戻した。

「そんなっ……」

また祭が叫んだので、また祭の方を向くと

「だからこつち見ないで！見ないで聞いてください！でない殴りますよ！！」

「分かったから早く話せって」

青登さんが今朝顔面パンチされた箇所を押さえながら言った。

私達はまた視線を祭から外して、不自然に色々な場所に視線を向けた。

「そんなネガティブな事言ってるんで、辞めないで済む方法を考えたらいいじゃないですか！！」

祭のマトモな発言にみんなはビツクリする。

でも、誰も祭の方を見ようとはしなかった。見たら殴られそうな勢いだからだ。

「そうだよ。まだ決まった訳じゃないんだもの。何とかして売上げを伸ばすように頑張ればいいんじゃないのかな」

苑子さんがコーヒーを持ってきてテーブルに置きながら言った。そして祭にはコーヒーを手渡した。

そうか…そうだよね。まだ閉店するって決まった訳じゃないんだもん。これからウナギ登りに売上げを伸ばしていけば閉店は免れるかもしれない。

私は、朝に稀一さんがしていたウナギ登り〜のジェスチャーを思い出しながら、熱いコーヒーを一口、口に入れた。

「お疲れ〜」

稀一さんが入ってくる。

「お疲れ様です」

私達はみんな声を合わせて言った。

「苑ちやくん、俺にもおすすい〜コーヒー入れてくれる〜？」

稀一さんは炊事場の所で後片づけをしている苑子さんに一言叫ぶと椅子に座ってる私をシツシツと手で追い払った。

私は渋々自分の椅子を明け渡すと、代わりに稀一さんがドカッとそこに座った。

お前には口がないのか、口が。

一言、『座らせてください』とか、『自分年寄りなものですから足腰が弱くて…』とか何か言えっただ。

私は軽く不満を持ちながらも、自分のコーヒーカップを持って祭の隣に移動した。

「うちの店がさあ、もっと売上げアップすれば閉店しなくて済む訳？」

咲真さんが稀一さんに聞いた。

「ま、そんな簡単な事じゃないんだけどな。

うちの場合、年間通してずっと売上げが悪かったからさ、一過性的に売上げアップしてもたまたま扱いされて終わるんだろうしさ。

その売上がこれからもずっと続く、っていう確証がない限りは難しいだろうな」

稀一さんは、ポケットからタバコを取り出す。

「あれ？稀一さん、禁煙したんじゃないっけ？」

苑子さんがテーブルに稀一さんのコーヒーを置きながら言った。

「禁煙？苑ちゃん、俺の辞書に禁煙と禁欲という言葉は存在しないんだよ。何人たりとも俺を禁ずる事はできない…なぜなら、俺はカリスマ店長だからだ！」

稀一さんは椅子から立ち上がると、自信満々に高笑いした。

そのカリスマ店長の店が潰れそうってどういう事なのでしょう。しかも禁煙はともかく、禁欲ができないって単なるエロいオッサンって事ですよね。

私達は無視してコーヒーを飲んだ。

稀一さんは椅子に座りなおすと、タバコに火をつけた。

「ま、禁煙の話はどうでもいいとしてだな、この店を閉店させない為には、ワースト8位から15位になったぐらいではダメだって事。

劇的に一気に売上げベスト10位に入るぐらいの勢いじゃないとさ。

このトカゲのしっぱ切りのな話は、全店舗に知れ渡っているから、他の店も今まで以上に必死になってくるんだろうし、簡単にはいかないだろうな」

稀一さんはタバコを吸いながら言った。

「で…でも、頑張ってみなきゃ分からないじゃないですかっ!!」

祭が壁に向かって叫ぶ。

「なぜ壁に向かって話してる？」

稀一さんが尋ねる。

「みんながこっちを見るからです!!」

祭は後ろ向きでソファーに正座をしながら叫んだ。

稀一さんはタバコを吸い終わると、持ってきたファイルを取り出した。

それをテーブルに広げる。

「うちの売上げを部門別に見ていくと、コミックとティーンズ文庫は結構いいんだよ。

これは全国の支店の中でもなかなかの上位の売上げだと思う。とりあえず、これはこのまま伸ばしていくとして、後は他の部門をどうするかだな。

実際、置いてる本に関してはどこも似たり寄ったりだからさ、要はどうやって客を増やすか、って事になるな」

私達は、テーブルに置かれてるファイルを覗き込みながら話を聞いている。

「とにかく、全国的に売上げがいい支店ってのは、ショッピングセンター内にテナントとして入ってる場合が多いんだよ。あとは大型スーパーが隣接してるとか、客が集まる要素のある店が周囲にあるってのが最大の武器になる。

残念な事に、うちの店は立地条件としては最悪。市内から外れてるからここに来る客は限られているし、市内に住んでる奴らはショッピングセンター内の本屋に行くか、市内中央にある本屋に行くのが多いだろうしな。そういう客をいかにうちの店に来させるかが問題だな。」

稀一さんは、腕組みしながら真剣な顔で語っている。

私達は稀一さんの事をじーっと見ていた。稀一さんはハッと私達の視線に気が付くと

「なっなんだよ」  
焦って叫んだ。

「イヤ、なんか稀一さん、いきなり店長っぽいな」と思ってさ」  
青登さんがニヤニヤして言う。

「今まで一緒に働いてきて、こんなに真剣な稀一さんは初めてみた  
ような気がする」

太郎も凄く感心して言った。

「お前ら、俺をバカにしてんの？」

稀一さんはひきつり笑いしながら言った。

「そんな事ないですよ、みんな真剣に聞いていますから」  
苑子さんがにこやかに言った。

どうすればお客様が来てくれるか。お客様が来るにはどうすればいいか。それが分かれば苦労しないっー話だ。

私は色々考えてはみたが良案が浮かばない。

「よし！」

青登さんがイキナリ立ち上がる。

何か名案が??

私達は一斉に青登さんを見つめた。

「明日から、沙和・苑子・祭は全員、高校ん時の制服着用だ!!」  
は?

私と祭は目が点になる。

「オタク心を刺激する作戦か、それはナイスアイデアだな!!」  
稀一さんがエラく納得している。

「コミックの売上げの傾向としては、うちの店にはかなりマニアッ

クオオタク達が沢山来ていると思われるので、その作戦いいかも知れないっす」  
太郎が賛同する。

「バカかあんたらは！！ド変態！！死ね！！」  
私は叫ぶ。

「死んでやる、舌噛み切って死んでやるうっう！！」  
祭が顔面蒼白で叫んだ。

「わあ、制服なんて何年ぶりかしら」  
苑子さんだけはウキウキしながら言った。  
なんで着る気満々なんですか、苑子さんは！！

「ま、やっぱ最初からコスプレはハードルが高いからさ、それは追々やっていく事にして…とりあえず女子は毎日ミニスカ着用って事でどうか？」  
咲真さんが笑顔で提案する。

何マジメな顔でバカな提案してんの？この人。  
でも一瞬だけ『ああ良かった、単なるスカートならまだましか』ってホッとしてしまった自分に驚いた。危ない危ない…まんまと作戦に引っ掛かる所だった。

「賛成の人、挙手〜！！」  
稀一さんが手を挙げると、男全員手を挙げた。  
あーバカだバカだ。バカばかりだ。

私はニコニコしながら挙手してるバカ共を呆れた顔で黙殺した。

もう一人、笑顔で手を挙げている苑子さんを見て、私は静かに首を横に振った。

苑子さん…あなたって人は  
大きく1つため息をついた。

？

次の日。

「おー！！いいねえ苑ちゃん。美脚だねえ」

稀一さんは、手で四角を作りカメラマンの真似をしながら苑子さんを褒めている。

苑子さんも、慣れた感じでポーズを取っていた。

いつも苑子さんは長めのふんわりしたスカートを穿く事が多いが、今日は言われた通りの膝上の短いスカートを穿いている。

でも、やっぱり苑子さんは足が細くてキレイだからどんなスカートでも凄く似合うのが羨ましい。

私はしばらく苑子さんのスカート姿に見入っていた。

「お前、スカート履いてんのに仁王立ちすんのやめとけよ」

太郎が私の背後から声を掛けた。

私は慌てて足を閉じると、クルツと後ろを振り向いて

「見ないでよ！ど変態！！」

太郎の頭に空手チョップをした。

「痛つてえ！！」

太郎は頭を抑えた。

「何すんだよ急に、痛つてえな……。しかしあれだな。

お前よくもそんな凶太い脚してスカート穿いてこれたな。

ある意味お前：侍だよな。その勇氣ある行動と無謀さを称え、今日からお前も俺と同じラストサムライと名乗る事を許可する！！」

太郎は私の肩をポンポンと叩くと、右手の親指を立てて「イエーイ」

と呟いた。

「…結構です。」

私は太郎のおでこを思いつきりグーで殴ってやった。

太郎は余りの痛さに、おでこを抑えながらその場にうずくまった。

何がラストサムライだ。そんなん名乗りたくもないわ！！ってか、  
図太い脚という意味が全く分からない。

私は、一人黙々と雑誌を並べ始めた。

まさか昨日の提案が本気だったとは思ってもみなかった。

昨日家に帰ってから、稀一さん達から『明日は短めスカート着用』  
という内容のメールが来て、全てに「嫌です」と返信したのだが、  
こっちが了承するまでしつこくストーカー並みにメールが届き、

無視したら今度は電話攻撃が始まり、電源を切ったら更に今度は家  
電に掛かってくるというしつこさに、家族への迷惑と眠さの限界に  
達してしまい

「分かりました」と返事してしまった。

元々スカートはあまり穿かないので、お姉ちゃんのを借りて穿いて  
きたのだが、お姉ちゃん私の幼児体型とは違ってスタイルがいい  
から、ウエストが少しきつめなのが凄くムカついた。

私は無意味にお腹を凹ませてみる。

こんなスカート穿いたぐらいで、客が増えたらわけないって話だ。  
私はふて腐れた。

「お前、俺のスカート作戦をバカにしてるな？」  
稀一さんが私に話しかけてくる。

いつから、あなたの作戦になったのでしょうか。ってか、店長がこんなチンケな作戦を俺の作戦などと自慢げに言うのって如何なものでしょうかね。

「…別に。」

私は稀一さんを軽蔑の眼差しで見つめた。

「とにかく、11時と2時は脚立に登って無意味に展示物の貼り替えタイムにしよう」

コイツ、またまたバカな提案をしゃがったな。  
このスカートで脚立に登れと？

「イヤイヤイヤ、ムリムリムリ、ムリですって稀一さん」  
私は首を超高速スピードで左右に振った。

「こんなスカートで脚立なんかに登ったら、パンツ丸見えになるじゃないですか!!」

「そう!! 題して、パンチラ作戦ならぬ、パンツ丸見え、略してパン丸作戦!!」

「バカですか、稀一さんは!!」

「一応有名大学は出たよ」

「そういう事言ってるんじゃないんです!!」

ホント、この人上に立つ資質があるのだろうか。私は力なくため息をついた。

「稀一さん、客にパンツを見せる店なんて、そんなの本屋じゃないですよ！？そんなのいかかわしい店のする事じゃないですか！！  
青少年指導センターに通報されますよっ？」

「ウソウソウソ、ウソに決まってるじゃん」  
稀一さんは笑って言った。

「なんだジョーダンか…」  
私はかすかにホツとした。

「丸見えはさすがにマズイから、やっぱりチラリズムを追及した方がいいよな！！  
見えそうで見えなそうで…やっぱり見えそうで、っていうギリギリの所が逆にそそるっていうかさあ、なあ、沙和」

あああああ…  
やっぱり、相当な類まれないアホだ。

「稀一さん、やつほう」  
ふと声をする方向を見ると、苑子さんが脚立に登って手を振っている。

プハッ！！  
私は吹きだした。

苑子さん、なぜあなたって人はノリノリでそこまで出来るんですか  
！？

世間知らずのお嬢様って、ある意味汚れてない分純粹過ぎて怖いです…。

苑子さんは、見えそうで見えないギリギリの所で脚立に乗っていて、ある意味プロ級だ。

稀一さんは、苑子さんの所に走っていくとまたカメラマンの真似をして

「いいねいいね〜！！この見えそうで見えないもどかしさ？いやーそそるねえ！！グツジョブだよ、苑ちゃん！グツジョブ！！」

四方八方からカメラを撮る真似をしながら苑子さんを眺めて褒めまくった。

果たしてこの作戦が吉と出るか凶と出るのか。

私ははしゃぐ2人を見ながら更に深いため息をついた。

「女どもばかりに努力させては男が廃るってもんだよな」

「だな、俺らもなんか考えようか」

青登と咲真が店内の片隅に置いてある作業台の所で話し合っていた。

「うちの店はさあ、男の客は結構来るんだよな。お前何時間うちの店いる気だよっ？って聞きたくなるような客が多いしなあ。ま、買っつてくれるんなら何時間居てもいいんだけどさあ」

青登が発注書にいたずら書きをしながら言う。

「だからさ、一番うちの客層として低い成人女性客…というか、子連れの客とかはどうしてもショッピングモールの方に行っちゃうかな〜…」

で、ついでにそこに入ってる本屋で本を買っちゃう訳じゃん？

だから、その人達を何とかして、うちの店に引き込めるかがポイントになるよな〜」

咲真の意見に、青登が何かを思いついたかのようにハツとした表情を浮かべた。

「やっぱり今、子供達に大人気と言えばヒーロー戦隊モノだろ！！お母さん達をも虜にしているというイケメン俳優達！！それを利用すれば子供とお母さん、一気にゲットできるぜ！！」

「この田舎の本屋にどうやって連れてくるんだよ、そのイケメン俳優達をさあ」

「バカだな、俺らがやりゃいいんだよ！！だってさ、俺らイケメン俳優なんかには負けないぐらいのイケメンなんだからさあ！！」  
本屋戦隊、ブックマン！！みたいなさ？どうこれ？」

青登が手を斜めに上げてポーズを決める。

「…本屋戦隊ブックマンって、カッコイイの？もう少しひねりなよ。

ホラ、戦隊モノだったら　ジャー、みたいなのが定番なんじゃないの？」

「そつか…じゃあ、活字戦隊本読むんジャー！…ってのはどう？」  
「本読むんじゃ…って…思いつきりおやじギャグ入ってるよね、それ」

咲真が苦笑いする。

「じゃあ、お前も考えるよ！！俺は結構良いと思ったんだけどな、本読むんジャー！！」

また青登が片手を挙げてポーズを決める。

「そつだなあ…活字戦隊、はいいとして…活字戦隊、新刊ジャー！…ってのはどう？」

咲真も同じようなポーズを取る。

「シンカンジャー！！カツコイイよ、咲真！！超ナウイよ！！イケてるよ！！」

目をキラキラさせて青登が咲真の手を握る。

「ナウイは死語だけだな。よし、これで決定だな青登！！」  
2人見つめあつて頷いた。

「で、言いだしっぺの俺がシンカンレッドでいいよな」  
青登が笑顔で言う。

「は？お前はどうか考えてもシンカンブルーだろ？名前に青の字が入ってるんだからさあ。」

「名前なんか関係あるかよ、俺は絶対レッドがいいんだよ」

「レッド役は、高身長の俺がやることによつて全体的にまとまりが出来て見栄え的によくなるんじゃないか」

「身長なんか俺と大差ねーだろうが。いいか？ブルーは結構クールな奴が多いんだ。どう考えても、俺という人間にクールなんて形容詞は当てはまらないじゃないか、そうだろう？」

「そうだな。お前はどうか考えてもお調子者のイエローって感じだな」

「バカ言うなよ、イエローは確実に沙和っちだろうが。」

「あーうんうん、納得」

また2人は頷き合った。

私は、隅の作業台で何かしら手を挙げたり握りあったり頷き合っている青登さん達をレジから胡散臭そうに見ていた。

一体、あの人達は何をやっているんだろうか。

マジメに仕事しているとは到底思えない。

また変な事を考えているのではないだろうか。

あの2人が考える事が、マトモだった試しは今まで一度もない。妙な悪寒が身体中を駆け抜けて、思わずブルブルツとした。なんか嫌な予感がするんですけど…気のせいだろうか。

私はずっと2人の姿を見つめていた。

？

数日後。

苑子さんの脚立でミニスカが功を奏したのか、男性客が多少増えてきた。

いかにも秋葉系の客が、ニタニタしながら苑子さんを見つめている。凄く不気味でたまらないが、そういう人達に限ってコミックを大人買いしていくので何も文句は言えない。

私のミニスカは、初日でお役御免になった。動きがぎこちなくて仕事に集中できず、レジでお釣りを間違えるわで、もう穿いてこなくていいと稀一さんから言われた。

祭の方はというと、そんな事したら売上が上がる前に辞めそうだと判断され、免除されたらしい。

ま、苑子さんだけの力で、これだけお客様が増えたのだから稀一さんも文句はないだろう。

コミック担当の太郎は、コミックの売上が前よりかなり上がって、最近は終始笑顔が絶えず、キモイぐらいに毎日ニヤついている。

今日もレジ脇のパソコンでニタニタしながら発注をしていた。

「お前の方はどう？売上伸びた？」

太郎が私に話しかける。

「まあね」

「俺は絶好調」

「ふーん」

私は、レジにお客さんが来たので手短に返事するとお客様の方を向いた。

「いらつしゃいま…」

私は全部言い終わらないうちに言葉を止めた。

男の客のズボンのチャックが開いており、そこから男のあの部分がチラリと顔を覗かせていた。

トイレに行ってしまったし忘れてたが、それとも暑いからクールビズ的な感じで…ってそんな訳がない。

客はニヤニヤと私の反応を見ていた。

最近お客様も増えたが、変な客も多くなって本当に嫌になる。これはミニス力作戦の恩恵の代償なのだろうか。

「580円でございます」

私は、その部分から目を逸らさずにレジを打った。そして、パソコンの所にいる太郎の袖をクイツと引っ張った。

「ん？」

「ちょっとあれ見て」

そう言っつて、太郎にアゴで客の方を見るの合図をした。

太郎は客の方を向いて、男のあそこがモロ出しになっているのに気付くと

「…小っさ…!」

太郎は思わず呟いた。

男の人はハツとした顔をして太郎の方を見た。

「ああ、やっぱそう？私もそう思ったんだよね〜」

「えっ、お前なんでこれが小さいって分かったんだよ、誰のと比較したわけ？」

「んふふ、それは秘密です」

私は含み笑いをする。

「だって、これってありえないでしょ？これじゃ〜満足できそうにないっていうかさあ〜」

「確かにな、俺の親指の大きさにも満たないんじゃないかなあ。

気の毒過ぎる…俺だったらマジ死にたくなる。」

太郎が自分の親指を出して切なげに見つめた。

「でもさ？こんなチンケな代物をだよ？人様に堂々とお見せるできるなんてさ、ホント勇氣ある行動だと俺は思う。」

ある意味立派だ、男として尊敬する。イヤ、もしかしてこれぞ真のラストサムライなのかも知れない！！

己の小ささを隠すことなくこんなふうにさらけ出せる真の勇氣…侍だよなあ。」

太郎が男を褒めまくった。男は今にも泣き出しそうな顔をして私達を見ていた。

「っていうか、お前このサイズじゃ満足できないのは当然だとしても、どんぐらいのサイズなら一体満足できんだよ」

太郎が私の腕を指でツンツンと突ついた。

「そうだな、太郎ぐらいのがちょうどいいかも知れないな」  
私も可愛く、太郎の腕を指でツンツンと突ついた。

「んもう、バカだな、照れるじゃないかよう、欲張りさんだな」

「えへへへへへ」

2人してレジ内で押しくらまんじゅう状態になる。

「うわああああああん」

いきなり、その客は自分のあそこをスポンに仕舞いこむと泣きながら走って出て行った。

私達は、その客が見えなくなるまで店の窓から覗いていた。

「お前、残酷だな」

太郎が呟いた。

「そつちが先に小さいって言ったんじゃん」

「だって本当だし。っていうか、お前：誰と比べて小さいと判断したのかをまず答えろ」

「小さい頃うちの家の近所にね、牛飼ってる家があったんだけど、よく牛の乳しぼりさせてもらってさ、その牛の乳を思い出したんで比べてみた」

「牛の乳より小さいってある意味男として切ないよな」

太郎が切なそうに胸を抑えた。

そういうものなのだろうか？見た事ないから良く分からないが、私は切なそうな太郎を横目に見ながら仕事に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8446z/>

---

単なるブックス未来屋酒田店

2011年12月28日07時56分発行